

別冊

おいしだものがたり

～資料館資料編～

“うしのこにこゝろなくさむゆふまぐれ”

松尾芭蕉筆『五月雨歌仙』より

元禄2年5月30日(1689年7月16日)、大石田の最上川辺にある高野一栄宅で、芭蕉・曾良・一栄・川水の四人で巻いた「五月雨歌仙」が満尾しました。その後芭蕉は「その辺を散歩し、帰ってから何かを書いていた」(曾良日記)ことから、この歌仙36句を清書していたと思われます。『おくのほそ道』では「わりなき一卷残しぬ。このたびの風流ここに至れり」と満足そうです。

幸い芭蕉真蹟の「わりなき一卷」は現在も大石田に残っています。歌仙の発句(第一句)は「さみだれをあつめてすゝしもがみ川」で、一栄宅から眺めた最上川を、一栄らに対するあいさつの意味を込めて詠んだものです。この後実際に舟で下った体験などから、『おくのほそ道』では「早し」と改められたのでしょう。

この発句に一栄は「岸にほたるを繋ぐ舟杭」と、芭蕉と曾良をねぎらいながら、その逗留を喜ぶ脇句(第二句)を付けます。一栄は舟問屋兼組頭でこのとき54歳。3句目で曾良が「瓜ばたけいざよふ空に影まちて」と視点を広げると、高桑川水が「里をむかひに桑のほそみち」と続けます。川水は大石田の村の大庄屋(このとき隠居で芭蕉と同じ46歳)です。そして5句目が、前に掲げた一栄の「うしのこに」の句となります。

ところで、俳諧(連句)において芭蕉は「停滞」を嫌い、「歌仙は36歩なり、1歩も後に帰る心なし」と説いています。前の句の句意を感じ取りながらも、全く異なるものを詠むような大胆な発想の転換が求められます。また、打越(前の前の句)と同じ内容の句も嫌われます。

では、「うしのこに」の句はどうでしょうか。前の句を受けて夕暮れの静寂が詠まれています。「桑のほそみち」あたりに仔牛がいるという景で、望ましい発想の飛躍や進展が見られません。さらに「ゆふまぐれ」の表現は、打越の曾良の句「いざよふ空」から離れきれいていません。前出の芭蕉の俳諧信条としては、歌仙への採用基準を満たしていないとも受け取れますが、これが敢えて見逃されたのは、この句の素直さと抒情性のためだったのだろうといわれています。(高藤武馬『奥の細道歌仙解釈』)ここに芭蕉が「水雲重しふところの吟」と俳諧らしく漢詩調で続けます。漂泊の詩人が、垂れ込める雨雲の下歩いて行く姿を詠み「さあ、進みましょう」と促しているのです。

芭蕉の指導のもと出来上がった歌仙を追っていくと、素朴で熱心な大石田の俳人二人が芭蕉を深く尊敬し、必死に教えを請おうとする姿が浮かんできます。また、川水が途中まで出迎えたことや、一栄と二人で途中の薬師堂まで見送り、その際芭蕉ばかりか曾良のためにも馬を用意したことなどから、精一杯のおもてなしをしようとする一栄と川水の心が伝わってきます。だからこそ芭蕉も敢えてこの歌仙を清書し、この地に残してくれたのではないのでしょうか。

大石田町立歴史民俗資料館 館長 佐藤里美

奥の細道サミット開催記念特別展「松尾芭蕉と大石田の俳諧展」は7/29(日)まで



楽がき帳

町の人口 平成30年7月1日現在

世帯数	2,354戸	(-1)
総人口	7,170人	(-18)
男	3,512人	(-13)
女	3,658人	(-5)
(6月中の異動)		
出生	0人	転入3人
死亡	10人	転出11人

※この人数は外国人も含めたものです。

連日暑い日が続くなか、維新組は維新祭に向けて大石田小学校の体育館で夜間の練習をしています。先日は、午後6時半ごろに体育館の鍵を開け気温を確認すると室温は32度。窓など開けられるところはすべて全開にしていたのですが、帰りぎわ午後9時ごろに気温を見てみるとまだ30度ありました。水分と休憩をしっかりとって熱中症に注意しながら、本番に向けて頑張りたいと思います。

さて、中学生の職場体験学習、役場総務課で体験をされた大山さんと小玉さんのお2人に、2ページ分の紙面を作成していただきました。2人には事前にも伝えていなかったのですが、突然カメラを持たされてかなり戸惑ったと思いますが、積極的に仲間や大人たちと話を聞き、真摯に取り組む姿がとても印象的でした。そして私も仕事について考える機会になりました。(あ)